はじめに

これまで現場の保育者の声をたくさん聴いてきました。

「子どもの主体性を大切に、子どもを尊重した保育を……と求められるけど、どうすればそれができるのか、どうやればいいのか教えてくれる人はいません」

「周りの保育士は子どもとうまくやっているのに私はできていません。私は保育士に向かないのでしょうか」

「子どもが言うことをきかないのはあなたが甘いから、なめられないようにもっと毅然（きぜん）としなさいと言われるのですが、その先輩たちがしている保育がいい保育には見えません。とはいっても、私が子どもをうまく動かせないのも事実なので……」

保育や子育てに正解はないとよく言われます。

しかし、だからといってなにをしてもいいわけではありませんし、場当たり的ですむものでもありません。保育における具体的な実践方法が現場の保育者から求められています。

冒頭の声はどれも、子どもと保育士が信頼し合えているかどうか、という点が根っこにあります。この本では、信頼関係を築くことを目指し、こういうときにはこうかかわってみるとい

いですよという方法を具体的に書いていきました。同時に、その際の子どもの見方や対応する姿勢もあわせて示しています。というのも、保育は人が人にかかわる仕事なので、保育者のスタンスがとても重要になるからです。

また、保育は不適切な「当たり前」の入りやすい仕事でもあります。

社会問題にもなっている保育士による虐待は、不適切な保育の最たるものですが、一般の子育てでは普通に使われる方法も、保育としては不適切な方法がたくさんあります。適切な方法を手応えあるスキルとしてもつことで、保育者が自信をもって子どもにかかわることができるようになっていくはずです。

目の前の保育がうまくいかないことから、自己否定になってしまう人は多いです。

しかし、保育について悩むこと、僕はそれ自体とてもいいことだと思います。

保育や自分自身のかかわりに対して問題意識をもちつづけることが、保育者として成長していくためには欠かせないからです。

しかし、出口の見えない悩みはしんどいものなので、本書がその手助けになればと願っています。

はじめに ―― 2

第1章

信頼をはぐくむ保育のきほん

目指すのは安心 ―― 10
優しい支配に気をつける ―― 12
いまはまだできないととらえてみる ―― 13
先に大人が子どもを信頼する ―― 15
「世間の子ども観」を乗り越える ―― 17
「世間の子育て観」を乗り越える ―― 19
「ちゃんと、きちんと、しっかり」を箱にしまう ―― 20
信じて待つ ―― 23
信頼をはぐくむスキル ❶ 正直に言う ―― 24
信頼をはぐくむスキル ❷ モヤモヤを引き受ける ―― 26
信頼をはぐくむスキル ❸ 自分の失敗を書きとめる ―― 28
信頼をはぐくむスキル ❹ 事実だけを伝える ―― 30

信頼をはぐくむスキル ⑤ 寄り添いとしての見守り ― 33
コラム1 保育のきほんのきほん「楽しい」 ― 36

第2章

保育の見え方が変わる

赤ちゃんの受け渡し―モノ扱い ― 40
オムツ姿はかわいいけれど―無自覚さ ― 43
「子どもの周りに存在するもの」としての園の設備―文化的なあり方 ― 46
保育がモラハラになる瞬間―強い存在 ― 48
自分が老人ホームに入ったとしたら―当事者意識 ― 50
引っ張って誘導してしまうとき―子ども扱い ― 52
食事は完食させることがいいの？―正しさ ― 54
他者をジャッジしないスタンス―規範意識 ― 56
子どもが納得しないといけない？―配慮 ― 58
コラム2 僕は下手な保育士だった ― 60

第3章

注意したい言葉たち

その❶ダメだよ ―― 64
その❷おいでー ―― 68
その❸お約束ね！ ―― 70
その❹やめて／やめなさい ―― 72
その❺～しないなら○○します ―― 76
その❻～できたらお兄さん ―― 80
その❼○○マンいるよ ―― 84
その❽○○ちゃんが待ってるよ ―― 86
その❾ほらあぶないよ、ほらぶつかるよ……わかった？ ―― 90

コラム3
「なめられるな」「甘やかすな」と言われたら ―― 94

第4章

気になる子への伝え方

ケース❶ 素直に甘えられない子 ― 98
ケース❷ つい手が出てしまう子 ― 104
ケース❸ なかなかほめる点が見当たらない子 ― 108
ケース❹ 慢性的にネガティブな行動をとる子 ― 114

子どもとのかかわりに迷ったら ― 119

第1章

信頼をはぐくむ保育のきほん

信頼関係という言葉は保育の中で山ほど使われています。ですが、みなさんは先輩などから、
「信頼関係とはこれこれこういうものです。こうすることでこのようにできていきますよ。だからこういうポイントを大切にかかわってみてください」
のように伝えてもらったことがあるでしょうか。または、いま後輩に伝えることができるでしょうか。
僕は、実際に数百人の保育士の方たちにこの質問をしてきました。先輩や上司から明確にそれを教わったという人は、10人いたかどうかでした。

この章では、信頼関係とはどういうことか、どうすればはぐくむことができるのかを言語化していきたいと思います。

目指すのは安心

保育の目的とはなんでしょうか？

オムツをとること？　ご飯を残さず食べさせること？　静かにお話が聴けること？　友達と仲良く遊べること？　モノの貸し借りが上手にできること？

多くの人は、こうした「子どもが〇〇できるようにする」ことが保育なのだと、ついつい無意識のうちに思い込んでしまいます。現在の一般的な子育て観がそもそもそういう形になってしまっているからです。

実は、このフレーズには隠れている言葉があります。書き足してみるとこうなります。

「大人の介入で子どもが〇〇できるようにする」

子どもへのかかわりが、過保護、過干渉なものとなりがちなことが伝わってきます。具体的にはこのようなかかわり方として現れます。

・制止やダメ出しといった否定に類するかかわり

・子どもの良くない部分に注目し、指摘していくかかわり
・子どもに正しい行動を取らせようと干渉していくアプローチ
（圧迫的なものから、優しくコントロールするものまで）

保育の目標を「できること」に置くと、保育としての安定は遠のいてしまいます。

もし家庭や職場で、不機嫌さを醸（かも）し出している人がいたり、自分の行動にダメ出しをされるのではと常に顔色をうかがわなければならない人がいたらどうでしょう？

そうした空間で自分のパフォーマンスを十分に発揮できる人はほとんどいないでしょう。

子どもも同じです。安定してすごし、そこで成長のための経験を得ていくためには、周囲の大人への信頼、そしてそこから構築される安心という要素がとても大切です。

保育空間に安心感があれば、子どもはそこでくつろいだ自然なあり方で、自身の意欲や興味を発揮して、遊びにも生活にも取り組んでいきます。

つまり、保育の目的とは、保育者が目の前の子どもに干渉してその大人が考える正しさをもたせていくことではありません。個々の子が安心してその子らしいあり方で、ものごとに前向

きな興味や意欲をもち、取り組める環境や対人関係を構築し援助していくことなのです。

優しい支配に気をつける

誤解を恐れず言いきってしまうと、子どもとの関係には、支配のルートか信頼関係のルートのふたつしかありません。信頼のルートは、先ほどお伝えした安心から生まれます。支配のルートはどうでしょうか。

支配というと威圧的なかかわりをイメージするでしょう。それが良くないことはどの保育者もわかっています。気をつけたいのは、威圧的でない優しい支配です。

優しい支配とは、おだて、比較による誘導、釣り、おどし、ごまかし、疎外といったアプローチのかかわりです。

「○○できたらえらいな」（おだて）

「Aちゃんは○○しているよ、あなたはどうかな？」（比較による誘導）

「○○できたら、△△できるよ」（釣り）

「○○しないと、△△できないよ」（おどし）

「○○しないと、オバケが来るよ」（おどし）
「Aちゃんが来てほしいって言ってたよ」（ごまかし）
「○○しないと置いてっちゃうよ」（疎外）

このような優しい支配でコントロールしていくかかわりを安易に用いていけば、「コントロールしてもらわなければ行動しない子」を保育者が作っていくことになりかねません。

現実には多様な個性をもった子がおり、こうしたかかわりを使わないと日常生活をおくれないことはあるかもしれません。ただ、そうした個別のケースを除いても、優しい支配は子育て・保育の中であまりに多用されていて、それを使わない関係性が見えないという現実があることでしょう。

いまはまだできないととらえてみる

優しい支配を使わないと関係性が見えないことの根っこにあるのは、子どもを低くみなす価値観です。

注意したい言葉その1

ダメだよ

こう言ってみる

どうしたの〜？

みなさんの保育施設では、「ダメ」といった強い否定となる言葉をなるべく使わないような配慮を共有していますでしょうか？

園としてそうした配慮に取り組んでいるところ、園として明確に打ち出しているわけではないけれど自然とダメ出しをしない保育が構築されているところ、気にせず個々の保育者任せになってしまっているところ、注意やダメ出しが日々の当たり前になってしまっているところなどさまざまあるかと思います。

「ダメ」という言葉に無自覚であると、一日に何十回も気にせず口に出してしまう保育になりかねません。「ダメ」がやたらと増える状況になってしまうと、かえって子どもたちの姿は大変なものになっていきます。

なぜなら、自分がしていることに対して、「ダメ」という強い否定から入られつづけると、それは子どもにとって大きな負荷となるからです。また、常に否定から始まる人に対して、親しみをもつことは難しいでしょう。「ダメ」を積み重ねる保育者への信頼は

＼ここ大事！／

（子どもの行動に）
否定から入る

↓

聴く姿勢から入る

+アドバイス

おおらかなニュアンスというのは、「今日はいい天気で気持ちがいいな～」そんな気持ちで子どもとかかわるイメージです。同じ対応をしても、「この子をちゃんとさせなきゃ」とかかわるのとは反応が大きく変わってきます。

さがり、保育者の言葉をスルーしてしまう習慣ができてしまいます。

そうなると大人からすると困る姿を子どもたちは出さずにはいられなくなってしまいます。ダメを使えば使うほど、ダメと言わなければならない状況が増えてしまうのです。

実は、これは簡単に言い換えられます。それは「どうしたの？」に置き換えていく方法です。例として、子ども達がおもちゃの取り合いをしているシーンで見てみましょう。

子（おもちゃの取り合いでもめている）

保「どうしたの～？」

子（それぞれに自分なりの主張をする）

保「うんうん、ああ、そうだったんだね」

それまで「ダメ」で介入していた部分を「どうしたの～？」に変えてみます。「ダメ」という言葉はかなり強い否定、制止のニュアンスをもっていますが、「どうしたの～？」と聴く姿勢を打ち出すことで、そうした否定のニュアンスなしに、子どもが感情的になりそうになるところを自然に抑制することもできます。

「どうしたの？」の語尾を「の～？」と伸ばしているのは、保育者が前のめりに介入しないおおらかなニュアンスを醸（かも）し出すためです。

「ダメ」を「どうしたの～？」に置き換える提案は、「制止や注意、干渉、介入を最初から当たり前にしないようにしましょう」という話です。「制止や注意、干渉、介入をしてはならない」と勘違いして、子どもの危険をそのままにしていいということではもちろんありません。

研修などでこの話をすると、後者のほうで解釈する人も少なからずいるので、念のため申し添えます。

いまにも危険なことが起こりそうといった場面では、「ダメ！」と大きな声で強く介入しなくてはならないこともあるでしょう。それは危険防止を優先したという保育上の配慮として成り立ちます。

もし、みなさんの園において「ダメ」という言葉をたくさん使わなければ、安全を確保したり、子どもたちが生活上必要なことができない状況になっているのでしたら、それは言葉の置き換え以前のところに課題があるかもしれません。1章のスキルを活用していただき、子どもたちとの信頼関係を構築することに配慮をおいてみましょう。

ケース
2

つい手が出てしまう子

行動に絞ったNO

こうしてみる

ルールを説くのではなく、
信頼関係を通した「私」を用いる

園庭で追いかけっこをしていると、わざとじゃまをしたり、保育者に砂を投げつけたり、叩いたり蹴ったりすることでかかわってくるといった行動を常日頃から示してくる子がいます。そうした行動は、幼児になるにつれ多くなるようです。年齢が上がってもそうしたかかわりになってしまっているケースは、人とのかかわり方のモデルそのものがそういう形になってきていると考えられます。

「それは、あぶないからやめてね」などと注意することで、その行動がなくなるのであればさして問題ではないでしょう。しかし、気になる子、対応の難しい子の場合はそうならないケースもあります。

その子は、大人とかかわりたいけれどもど

うかかわればいいかわからず、不適切なかかわり方を身につけてしまった状態にあります。これを安定したものに変えることが解決につながっていきます。

我慢でも注意でもない方法

まずは前提となる信頼関係の構築、再点検をしてみます。信頼関係が希薄な中ではこれからお知らせするかかわりはうまくいきません。普段からの信頼関係の構築にいつでも戻ってみてください。それは後退ではないので少しも恐れる必要はありません。具体的なスキルは1章を、全体を通した振り返りであれば「子どもとのかかわりに迷ったら」（p.119）を参照してください。

信頼関係がある程度構築されていれば、保育者も「私」として「そのかかわりはイヤです」と伝えます。その上で、「こうすると互いに心地よくかかわれるんだよ」と具体的に伝え示し、それをその場で実践していきます。

「砂をかけられるのは私は本当にイヤです」

「そういうときは、こっちだよー（追いかけて）と言っていいんだよ」などと伝えます。

その後、一緒に追いかける遊びを楽しむことで、それを良いものとして経験させていきます。

この対応のポイントは、その子の存在を否定する言葉（やめなさい！など）ではなく、砂をかけるという行動に絞ってＮＯを伝えることです。

ＮＯを伝えた後に、園庭でのルールや「人の迷惑を考えなさい」といったモラルを付け足したくなりますが、それは逆効果です。子ども自身が考え行動する余地を奪ってしまいます。信頼関係を通した上での「私」を用いて、「砂をかけられて私はイヤな気持ちになった」ということを伝えるだけで十分なのです。

こうしてお互いにとって心地よいやりとりを交わすことで、ＮＯで始まったとしても、最後には受容・肯定のかかわりとすることができます。